

研究成果情報	園芸	42	果樹	栽培
新技術・情報名	施設栽培いちじくの温度管理技術		分類	②

1. 成果の内容

1) 技術・情報の内容及び特徴

いちじくの施設栽培における温度管理は、最高温度を30℃、最低温度は15℃に保つことにより、初期生育が促進され、品質の良好な果実が生産できる。

- (1) 無加温栽培における被覆開始から展葉までの生育は、最高温度30～35℃で促進される。この時期は、35℃までは高温障害が発生しない。
- (2) 加温栽培における加温開始から展葉期までの生育は、最低温度15℃以上で促進される。
- (3) 発芽から展葉期における高温では、40℃で葉焼けが生じ、45℃以上では新梢が枯死する。
- (4) 着果始めから新梢伸長停止期（6月下旬）までは、高温乾燥により、果実の肥大が抑制され、奇形果の発生が多くなる。

2) 技術・情報の適用効果

いちじくの施設栽培において、生育段階に応じた適正な温度管理を行なうことにより、高品質果実の早期出荷が可能になる。

3) 適用範囲

県内のいちじく施設栽培産地。

4) 成果の利活用・普及指導上の留意点

- (1) 本成果は、「榊井ドーフィン」（一文字整枝）の成績であるが、「蓬萊柿」の施設栽培にも応用できる。
- (2) 昼間の晴天時は、高温障害が発生する35℃以上の温度に上昇しやすいので、最高温度を30℃以上にしないよう換気に十分注意する。

2. 具体的なデータ

表1 無加温施設栽培の最高温度が生育促進に及ぼす影響(平成元年)

最高温度	処理開始a	発芽期b	展葉期c	着果始め	b-a	c-a	生育障害
℃	月.日	月.日	月.日	月.日	日	日	
25	2.27	3.24	4.8	6.2	25	40	なし
30	2.27	3.23	4.5	5.29	24	37	なし
35	2.27	3.23	4.6	5.25	24	38	なし

注) 品種は「併井ドーフィン」(以下同じ)

表2 加温施設における最低温度が生育促進に及ぼす影響(平成3年)

最低温度	所要日数	
	加温～発芽	加温～展葉
℃	日	日
20	14	19
15	14	19
15～13*	18	25
13	17	24
13～11*	17	24
10	24	31

表3 発芽から展葉期の高温条件と障害の発生(平成2年)

温度	時間	高温障害の発生
℃	時間	
35	5～25	なし
	5	なし
40	15～25	葉縁褐変
	5	枯死～14日後再発芽
45	15	枯死～19日後再発芽
	25	枯死～21日後再発芽

注) * : 2時間おきに変温管理

表4 着果始め～新梢伸長停止期の温湿度条件と果実の生育(平成3年)

最高温度	湿度条件	設定期間	果実横径*	1果重**	奇形果発生
℃	%	月/日	mm	g	%
35	80	5/27～6/28	25.7	43.6	0
"	20	"	12.6	31.2	14

注) ①* : 6月28日の果実横径

②** : 収穫時の果実重

3. その他特記事項

担当部科室名 : 豊前分場 果樹研究室

研究担当者名 : 粟村光男・正田耕二

研究課題名 : いちじくのハウス栽培技術

期間 : 平成元年～平成3年

予算区分 : 経常

既発表論文・資料名等 : 平成元～3年度 豊前分場 果樹試験成績書

取りまとめ責任者名 : 正田耕二